島根県

本当のありがとう

益田東高等学校

二年生 溝畑 康平

アメリカの初の黒人大統領オバマ氏は、ミルクのような白人の母と真っ黒いケニアの父から生まれましたが、その後両親は離婚。母は再婚して、彼はインドネシア人の父を持ちました。複雑な家庭のオバマ氏の当選が、この私にはすごく衝撃的なニュースとなりました。なぜなら

。私も、今の父とは血がつながっていません。父が替わったのは小学三年生の時。家も引越して、新しい学校に移り、家も学校もすぐになじめて楽しい日々でした。でも新しい父は、行儀に厳しい人で、前の家庭では言われたことのないようなことまで注意されたり、小学生のたわいもない嘘でも、嘘をつく度に怒られていました。正直、この新しい生活は苦しかった思い出があります。

そんな窮屈な生活をしていたある日、いきなり、あまりなじめなかった二番目の父から「風呂入ってこい。」と言われました。観たいテレビもあったけれど、仕方なく、嫌々風呂に入っていくと、しばらくして父も入ってきました。そして、「おとんと、前のおとんと、どっちがいい？」と聞かれました。あまりに急に驚いたけど、とっさに「おとんと」とはつきり答えました。すると父は、今にも泣き出しそうになりながら、小さい声で「ありがとう…」とだけ言って先に風呂から上がっていきました。後で聞くと、弟は「前のおとんと」と答えたのだと母から聞かされました。私だけでも「おとんと」と言っておいてよかったと思いましたが、厳しかった二番目の父は、ずっと私たちのことが心に引っかかり、いつも考えてくれていて、「いつ聞こう…いつ聞こう…」と思っていたに違いありません。また、あの風呂でのことは大変勇気の要る質問であったと思います。それでも、その後何かで怒られる度に、正直なところ（前のおとんの方がいいと言えばよかった）と後悔していた自分もいました。

そして小学四年生の十歳の誕生日を迎えた日、母から一通の手紙を渡されました。「親が替わり大変だったことでしょう。長男として頑張ってくれてありがとうね。そして何より私の子どもになってくれてありがとう。」そう書かれてありました。それを読み終えた時には涙が止まらなくなっていました。自分のことをここまで深く愛情を持って考えてくれてる人がいるということが何よりも嬉しく、生かされていると感じました。

しかし、中学校に入ってから反抗期を迎え、好きだった母に言われる一言一言がうっとうしく、時にはものすごい口論となりました。体格的にも母にまさり、一丁前の口をきく私を見て、「おかんもいろいろ我慢してるんや、康平もわかっちゃって」二人の間に入って救ってくれたのは、ほかでもない父だったのです。高校進学で迷っていた中学三年生。ある人の口利きで大阪から遠い島根県の高校を紹介されました。おまけに私学で寮生活ということもあり、内にお金のこと心配でした。それでなくても余るほどのお金があるわけでもなく、ましてや弟もいて父の稼ぎだけでは、とても無理だと、子供心に思っていました。けれど父は、「自分が島根で野球をやりたいかったら行ってこい。お前は生活のことや、お金のことなんか気にすんな。」と迷いを吹っ飛ばしてくれたのです。

高校の入学式が終わり、両親は大阪に帰っていきました。ふとみると父からメールが届いていました。そこには「高校生ですね。途中から君たちの父親になり、ずっと怒ってばかりの私に、よくついてきてくれましたね。親の元を遠く離れて暮らす君を誇りに思います。そして何より、私の子どもであってくれて本当にありがとう。」と。あふれ出る涙をこらえるのが精一杯でした。そしてそのとき「本当のありがとう」の意味がわかったような気がしました。それは一言では言い表せません。また、「ありがとう」は人によって使い方も違い、使う人の思いや考え方が伝わってくる不思議な力を持っています。二番目の父はそんな「人の心を動かす一番大切な言葉『ありがとう』」をゆっくりと時間をかけて教えてくれた人だと気づきました。話す言葉や肌の色の違いは関係ありません。世界、人類は一つなのです。血はつながって

なくても心はつなげることができし、現につながっているのです。

私は照れくさくてメールで「ありがとう」とだけ返信しました。でもいつの日か、今度はきちんと言葉で思いを伝えたいと思っています。

その日が来たら…

「血はつながっていなくても、一生懸命に僕たちを受け止めてくれるおとんを誇りに思います。そして何といても、おとんが僕たちの父親になってくれたこと、いや父親であってくれてホンマにありがとう。これからもよろしく…」と。